

【講義 6】 装訂・料紙について

落合 博志

一、はじめに

日本の古典籍において、装訂と料紙は、書誌の最も基本的な事項に属する。装訂や料紙によって、本の製作年代や、製作の環境・目的などが推定できる場合もあり、本の性質を知る上で不可欠の要素と言える。

装訂・料紙とも少し込み入った話になるので、あまり古典籍に触れた経験がないとすぐには飲み込めないかも知れないが、慣ればそれほど難しいことではない。この講義が、古典籍の装訂と料紙についての認識をさらに深めるきっかけとなれば幸いである。

二、日本の古典籍の装訂について

【日本古典籍の装訂とは】

現在の書物では、「装訂」という言葉は本のデザイン（狭くは表紙や扉など、広くは造本全体）の意味で使われることが多いが、日本の古典籍においては、「装訂」は基本的に、紙をどのように使って一つの本を作るかを指す。

冊子本さつしほんにおいては、綴じ方こより（糸や紙縫などの通し方）にいくつかの種類がある。綴じ方も装訂の一部であるが、装訂の分類基準は紙の使い方が第一で、綴じ方の違いはその下に位置する。

【日本古典籍の装訂の特色】

世界の書物の中での日本古典籍の装訂の大きな特色として、以下の 3 点が挙げられる。

(1) 装訂の種類が多様であること：卷子本・折本・冊子本に大別され、更に冊子本に多くの種類がある。

(2) 古い時代の装訂が長く継承されたこと：新しい装訂方法が考案されても、そのために古い装訂が減ぶことはなく、さまざまな装訂が並存していた。

(3) 写本に特有で版本には見られない装訂、版本にもあるが分野が限られる装訂があること：日本の古典籍は写本が基本で、版本はその応用として作られたことと関係すると考えられる。中国やヨーロッパでは、版本（印刷本）が出現すると書物の主流が版本に移ったが、日本では後々まで写本が重視された。

三、日本の古典籍の料紙について

料紙は、本を製作するのに用いられた紙を指す。ただし本文とその前後にある序跋・目録などに用いられた紙を言い、表紙については含めない。なお表紙に本文と同じ紙が用いられている場合は、「ほんぶんともがみびょうし本文共紙表紙（共紙表紙）」と言う。

日本の古典籍の料紙は、こうぞ楮の樹皮を原料とするちよし楮紙、がんび雁皮の樹皮を原料とするひし斐紙が主要なもので、みつまた三桮の樹皮を原料とするみつまたがみ三桮紙も使われた。雁皮と楮を交ぜて漉いたひちよま斐楮交ぜ漉き紙、斐紙に泥土の粒子を混ぜて漉いたまにあいがみ間合紙（どろまにあいがみ泥間合紙）などもある。

斐紙は繊維が詰まっていて表面が滑らかという特徴があるが、雁皮は栽培が難しいため供給量が少なく、高級品であった。従って、斐紙を用いた本は、概して格の高い書物と言える。

参考文献

（装訂に関して）

『和書のさまざま』国文学研究資料館、2018年 ※国文学研究資料館 HP の「国文研の活動」→「調査収集」→「文献調査（地域資料専門部会委員の方へ）」

→ PDF ファイル「日本古典籍調査要領」の 27～42 ページにあり

石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書篇』法蔵館、1981 年

吉水蔵聖教調査団編『青蓮院吉水蔵聖教目録』汲古書院、1999 年

久曾神昇『平安時代仮名書状の研究』風間書房、初版 1968 年、増補改訂版 1992 年

山本信吉『古典籍が語る 書物の文化史』八木書店、2004 年

落合博志「仏書から見る日本の古典籍」国文学研究資料館調査収集事業部『調査研究報告』第 34 号、2013 年 3 月

(料紙に関して)

関義城『古紙之鑑』木耳社、1977 年

反町茂雄『歴代古紙聚芳』文車の会、1982 年

湯山賢一（編）『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017 年

日本古典籍の装訂について

◎は写本に特有の装訂。

○は版本にもあるが、一般的でない装訂。

【日本古典籍の装訂の三分類】

卷子本の類…卷子本・継紙

折本の類…折本・折帖・旋風葉

冊子本の類…袋綴・粘葉装・列帖装など

卷子本の類

卷子本 ○

定義：紙を横に貼り継ぎ、左端に付けた軸を中心に丸く巻いたもの。右端に表紙を付けて全体をくるむ。表紙の端に細い竹や木が巻き込んであり（八双）、そこに巻紐を付ける。

特色：紙面を必要なだけ広げることができる。ただし、任意の箇所をすぐに開けることができない。裏面（紙背）に注釈などを書き込むことができる。

歴史：現存する日本最古の書物である『法華義疏』（7世紀初め）以降の遺品が確認できる。奈良時代までの本は、全て卷子本であったと考えられる。

用法：絵巻をはじめ絵図の比重が大きい本や宗教書・芸道の伝授書などに、後代まで用いられた（後者は、簡単に中が読めないことが秘伝書に向いていたためか）。写本が多く、版本は経典や写本の模刻本など分野が限られる。

備考：冊子本（特に袋綴本）を解体して卷子本に直したものがしばしばあるので注意。その場合は「卷子本（袋綴改装）」などのように注記する。ただし袋綴本を直した場合は、通常各紙の中央に折り目の跡が残るので、判別が比較的容易である。

継紙 ○

定義：卷子本と同じく紙を横に貼り継いだものであるが、表紙と軸がなく、紙を繋げただけの形態のもの。

特色：卷子本に準ずる性質を持つが、表紙と軸がない点で簡略な形式と言える。

備考：卷子本のように巻いてある場合は、「未装卷子本」あるいは「巻紙」とも言う。ただし丸く巻いていないものもあるので、一般的な名称としては「継紙」が適切である。

折本の類

折本おりほん

定義：紙を横に貼り継ぎ、等間隔で山折りと谷折りを交互に作って折り畳んだもの。

特色：紙面を必要なだけ広げることができる。紙の継ぎ方は卷子本と同じであるが、冊子本のように任意の箇所をすぐに開くことができる。また卷子本と異なり、表裏両面が同じように使える。

歴史：平安時代末期（12世紀）以降の遺品が確認できる（東大寺蔵『新修浄土往生伝』保元3年（1158）弁昭写ほか）。

用法：さまざまなジャンルに亙って用いられるが、特に折本を主とするジャンルは見当たらない。経典の写本・版本に多いのは、中国の版経の影響か。

備考：本来の折本のほか、卷子本を改装した折本がしばしばあるので注意。その場合は「折本（卷子本改装）」のように注記する。

おりじょう

折帖◎

定義：一定の大きさの厚紙を横に繋げ、継ぎ目部分で折って畳んだもの。

特色：折本と同様、任意の箇所をすぐに開くことができ、表裏両面が使える。

歴史：手鑑は室町時代末期には製作されていたらしいので、折帖もその頃には存在していたか。

用法：手鑑や短冊帖など、読むためではなく書画を鑑賞するアルバムの的な本に見られる装訂。版本の例は未見。

備考：形態上は折本と似ているが、折本では料紙の継ぎ目と折り目が原則的に無関係な点で区別される。

旋風葉せんふうよう

定義：折本に、全体をくるむ形の表紙を付けたもの。

特色：本紙は折本と同じ形であるが、横に広げられず、折り谷を中心とした見開きしか見ることができない。折本と異なり、裏面が使えない。

用法：ほぼ経典に限られるか。

備考：実例は多くない。紙の使い方は折本と同じであるが、折本の特徴をあまり持たないので、別の装訂と考える。折本の特殊な形と見ることも可能。

冊子本の類

〔単葉系〕

袋綴ふくろとじ

定義：紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目と反対側の端を糸や紙繕こよりなど

で綴じたもの（紙縫で下綴じした後、更に糸で^{かが}膝ることもある）。

歴史：平安時代後期（11世紀）以降の遺品が確認できる（青蓮院旧蔵『諸仏菩薩釈義』嘉保（1094～1095）頃写、ほか青蓮院所蔵本）。綴じ方は、古くは紙縫で結び綴じにしたものが多く、糸で綴じたものが現れるのは鎌倉時代中期以降か。

用法：写本・版本を通じ、日本古典籍の装訂として最も一般的なもの。

備考：薄手の料紙を用いるものが多い。

おりがみとじ 折紙綴 ○

定義：折紙（横長の紙を折り目が下になるように二つ折りにしたもの）またはその半截を重ね、右端を糸や紙縫などで綴じたもの。

特色：縦横の比率が約1：3の細長い形状。

歴史：鎌倉時代末期（14世紀初め）以降の遺品が確認できる（称名寺蔵連歌懐紙ほか）。

用法：写本の例が大半で、記録や帳簿にしばしば用いられる。連歌や俳諧の懐紙もこの装訂。版本にもあるが、八文字屋本の浮世草子や記録など、特定の種目に限られる。

備考：薄手の料紙を用いるものが多い。ただし連歌・俳諧の懐紙は、鳥の子紙など厚手の紙を使うこともある。帳簿類については「長帳綴」あるいは「横帳綴」と呼ぶこともあるが、一般的な名称としては「折紙綴」が適当である。

たんようそう 単葉装 ○

定義：一枚の紙を折らずに重ね、端を糸や紙縫などで綴じたもの。

用法：ジャンルに関わりなく見られる。

備考：紙の両面に書写するため、墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普通。

〔双葉系〕

でっちようそう 粘葉装 ○

定義：紙を二つ折りにし、外側の、折り目の脇を糊代として貼り重ねたもの。

特色：右半葉（頁）と左半葉（頁）が同じ紙で背の際まで開く見開きと、右半葉（頁）と左半葉（頁）が別の紙で糊代の際まで開く見開きが交互に現れる。

歴史：平安時代中期（10世紀）以降の遺品が確認できる（石山寺蔵『息災護摩私記』承平7年（937）写本ほか）。古くは仏書・歌書などに広く用いられ、ある種の仏書（真言宗の諸尊法の柵形本）では明治以降までこの装訂を用いた。

用法：版本の例は、高野版や浄土教版など、仏書に限られる。

備考：紙の両面に書写するため、墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普通。

そうようそう 双葉装 ◎

定義：紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目の方を糸や紙縫などで綴じたもの。紙の使い方は粘葉装と同じであるが、糊を使わずに綴じる点で異なる。粘葉装のように背の際まで開く見開きはない。

歴史：平安時代からある装訂（冷泉家時雨亭文庫蔵私家集など）。

用法：天台宗や浄土真宗など仏書の例が多い。版本の例は未見。

備考：糊離れのした粘葉装の本を糸で繕って補修したものがあり、本来の双葉装と区別する必要がある。

おりがみそうようそう 折紙双葉装 ○

定義：折紙を使って双葉装としたもの。

特色：折紙を二つ折りにするので、縦横の比率が約 2：3 の横本の形となる。

歴史：室町時代には存在。

用法：さまざまなジャンルの写本に用いられる。ごく稀に版本の例がある（古活字版『六帖要文』『七帖要文』）。

備考：薄い料紙を用いるのが普通。

〔複式双葉系〕

れつちようそう 列帖装 ○

定義：紙を複数枚（5～10枚程度）重ねて二つ折りにしたもの（ひとくく一括り・ひとおり一折）を二つ以上並べ、糸などで綴じたもの。

特色：括りを付け足すことによって丁を増やすことができる（大福帳など）。

歴史：平安時代中期（10世紀）の仏書（石山寺蔵『金剛薬叉儀軌』『一字儀軌』）、平安時代後期（11世紀）の仏書（勸修寺蔵『敦造紙』）・歌書（関戸本『古今和歌集』など）の遺品が確認できる。

用法：版本の例は、一部の謡本や真言宗の声明本・浄土真宗の和讃本などに限られる。

備考：紙の両面に書写するため、鳥の子紙や厚い楮紙など、厚手の料紙を用いるのが普通。各括りの折り目の部分に上下二つずつ、計4箇所穴を開け、糸を順次通して行く綴じ方が一般的であるが、古くは紙縫などで結び綴じにした例もある。「綴葉装」という呼び方もあるが、「葉」を「綴じる」のは粘葉装・画帖装以外の冊子本に共通の製本法で、特定の装訂の名称としてはふさわしくない。

おりがみれつちようそう
折紙列帖装 ㊟

定義：二つ折りにした紙を使って列帖装としたもの。

用法：版本の例は未見。

備考：薄い料紙を用いるのが普通。「双葉列帖装」の名称は不可。

たんじようそう
単帖装 ㊟

定義：列帖装の一括りだけの形のもの。

歴史：鎌倉時代初中期（13世紀）以降の遺品が確認できる（冷泉家時雨亭文庫蔵『藤六集』『敏行朝臣集』など）。列帖装より後に発生したか。

用法：仏書・歌書・謡本など、さまざまなジャンルの写本に見られる。版本の例は未見。

備考：列帖装と異なり、折り目の部分の綴じ穴が2箇所だけのものもある。

〔その他〕

がじようそう
画帖装

定義：紙を二つ折りにし、外側の、折り目と平行の端を糊代として貼り繋いだもの。さらに粘葉装のように、折り目の両脇も糊付けする場合がある。

特色：折本や折帖に似た所もあるが、裏面が使用できない点で異なる。

歴史：江戸時代後期（18世紀）以降の遺品が確認できる。比較的新しい装訂。

用法：一枚で完結する絵を集めて冊子にする場合などに用いられた。版本の例が多く、写本は比較的少ない。

備考：日本の古典籍には珍しく、版本で最初に発生した装訂か。

《冊子本の装訂の体系分類案》

◇紙の用い方による分類

〔単葉系〕 袋綴・折紙綴・単葉装

→ 1枚の紙が1単位で、それが1丁（1葉）になる

〔双葉系〕 粘葉装・双葉装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、それが2丁（2葉）になる

〔複式双葉系〕 列帖装・単帖装

→ 複数の紙を重ねて二つ折りにしたものが1単位で、それぞれの紙が2丁（2葉）になる

〔その他〕 画帖装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、通常1枚の紙ごとに内容が完結しており、「丁（葉）」を以ては数えにくい（「紙

数〇枚」が妥当か)

◇綴じ方（糸や紙縫の通し方）による分類（*は仮称）

結び綴じ＝右端に開けた穴に紐や紙縫を通し、結んで綴じるもの。上方と下方に2箇所ずつ穴を開け、それぞれに紐などを通す例が多い。

膝^{かが}り綴じ*＝右端に複数の穴を開け、糸を通して膝^{かが}るもの。四つ目綴じが多く、五つ目綴じ・康熙^{こうき}綴じなどもある。

紙釘装^{していそう}＝右端に複数（3～4箇所）の穴を開け、それぞれに太めの紙縫を通して切り、はみ出した部分を木槌などで潰して広げ、抜けないようにして綴じるもの。

背穴綴じ*＝背の折り目に穴を開け、糸や紙縫を通して綴じるもの。上方と下方に2箇所ずつ穴を開け、それぞれに糸を通す例が多い。

etc.

※装訂の分類基準は紙の用い方を第一にすべきで、綴じ方の違いはその下のレベル。

【紙の用い方と綴じ方の組み合わせ】（糊を用いる粘葉装・画帖装は除く）

	袋綴	折紙綴	単葉装	双葉装	列帖装	単帖装
結び綴じ	◎	◎	○	○	○	○
膝 ^{かが} り綴じ	◎	◎	◎	◎	(△)	(△)
紙釘装	○	△	○	○	(△)	(△)
背穴綴じ	/	/	/	○	◎	◎

◎○は実例あり。◎はその装訂において多く見られるもの。

△はあるかも知れないが実例未確認。(△)はやや考えにくいもの。

/はあり得ない組み合わせ。

日本古典籍の料紙について

麻紙

大麻・苧麻などの樹皮を原料とする紙。主に奈良時代に用いられた。打紙加工を施されたものが多いという。

斐紙

雁皮の樹皮を原料とする紙。雁皮紙とも言う。厚く漉いた鳥の子紙（厚様斐紙）と、薄く漉いた薄様斐紙がある。繊維が短く詰まっており、楮紙に比べ表面が滑らかで、また薄様斐紙には透明感がある。

楮紙

楮の樹皮を原料とする紙。日本古典籍の料紙として広く用いられた。産地により、美濃紙・杉原紙（播磨）・高野紙（高野山）などの名称もある。楮紙は斐紙に比べ繊維が粗く、墨が滲みやすくまた筆を運びにくいため、木槌や石などで打って繊維を詰まらせ、表面を平滑にする加工がしばしば行われた。これを楮紙打紙（打紙）と言う。

斐楮交ぜ漉き紙

雁皮と楮を交ぜて漉いた紙。供給量の少ない雁皮から多くの紙を造る場合や、通常の楮紙より上等の紙を造る場合に交ぜ漉きが行われた。

三極紙

三極の樹皮を原料とする紙。三極は紙の原料として古くから雁皮や楮と交ぜて用いられていたが、江戸時代中期頃から薄様斐紙の代用として古典籍に用いられた。

間合紙（泥間合紙）

襖障子の幅（約 1 m）に合わせて漉いた斐紙が間合紙で、その内泥土の細かい粒子を混ぜて漉いたものを泥間合紙と言い、古典籍の料紙に用いられた（横型の奈良絵本など）。古典籍の料紙としては、単に「間合紙」と呼ぶことが多い。

宿紙（漉き返し紙）

一度書写または印刷に用いられた紙を漉き返して造った再生紙。元の紙に含まれる墨や新たに加えた墨の成分により、薄墨色を呈する。

[加工紙]

紙を漉く際、または漉いた後に、何らかの人為を加えた紙。

・紺紙^{こんし}＝藍を染料として紺色に染めた紙。主に写経（金字経・金銀字経）の料紙に用いられた。黄蘗染め紙^{きはだぞ}＝防虫の目的から、黄蘗の樹皮を煎じた汁で黄色に染めた紙。写経・版経の例が多い。

・礬水引き紙^{とうきび}＝礬水（膠を溶かした水に明礬^{みょうばん}を加えたもの）を塗った紙。墨の滲みを防ぎ、発色が良くなる。雲母引き紙^{きらび}＝雲母^{うんも}の細かい粉末を礬水や布海苔^{ふのり}に混ぜて塗った紙。胡粉引き紙^{ごふんび}＝胡粉（板^{いた}甫^ぼ牡蠣^{がき}などの殻から作る白い顔料）を膠水で溶いたものを塗った紙。具引き紙とも言う。

・打紙→麻紙、楮紙を参照

・泥間合紙→別記

[装飾紙]

加工紙の一種であるが、特に装飾を目的とする加工が施された紙。

・打曇紙^{うちぐもりがみ} 飛雲紙^{とびくもがみ} …漉く時に加工

・墨流し紙^{すみなが} から紙（蠟箋^{ろうせん}・雲母摺り紙^{きらす}など） 金泥下絵入り紙^{きんでいしたえい} …漉いた後に加工

《日本古典籍の料紙調査の問題》

古典籍の書誌調査において、料紙はどこまで「正確に」記述するか（すべきか）

料紙の選択に製作者の意識の反映があるか →ある場合にはある（常にあるとは限らない）

製作者・享受者が認識していた程度に区別すればよく、それ以上に区別するのは古典籍調査においては意味がない、という考え方もあり得る

…製紙業史（産業史）の研究ではない

古文書学の料紙研究との共通点・相違点

麻紙／真弓紙／苦参紙／穀紙／檀紙／強杉原／高檀紙／引合／懐紙／杉原、奉書／美濃紙／典具帖／斐紙、厚様・薄様／鳥ノ子／間似合紙／三楹／楮斐混合紙／／〈再生紙〉杉原／雑紙／漉返紙／色紙・染色／宿紙（『古文書料紙論叢』）

…差出者と受取者の関係や文書の内容によって料紙が選択される古文書と、特定の他者との関係において製作されることが比較的少ない古典籍の違い